



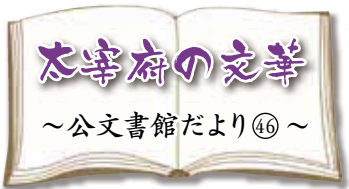
明治維新150年特集

山本忠亮ただすけ至誠の魂

大正2（1913）年10月21日、延寿王院の山門前で七卿西さいざい竄碑ざんぺいの除幕式が行われます。文久3（1863）年8月18日の政変により京を追われ西下することとなった七卿の姿を刻んだこの碑は、葦笠姿での離京から50年という節目に建てられました。来賓として式典に招かれたのは、慶応元（1865）年から同三年の間、三条実美さねよしら五卿に従って太宰府に滞在した志士、土方久元ひじまひさもとと尾崎三良さぶらです。土佐藩郷

士が出自の土方は、明治期に農商務大臣や宮内大臣を務め、伯爵に叙せられています。京都の宮家に仕えながら不遇の少年時代を過ごした尾崎も出世して男爵となり、宮中顧問官を務めました。立志伝中の人である二人がこの時忘れず訪れたのは、光明寺の丘陵にあった同志、山本忠亮の墓所でした（『尾崎三良自叙略伝』）。

土佐勤王党加盟者の一人、山本忠亮は天保13（1842）年の生まれ、「志操堅固、篤学の人」と伝えられています。21歳の時に三条実美の衛士となり、8月18日の政変後は西に逃れる実美らに随行します。しかしほどなくして肺を病み、摂生空しくその重篤なことを悟り、ついに慶応2年5月、「恥を知り捨るうき身も武士もりのぶの道に違はぬ心なりけ



り」という歌を残し、ここ太宰府で自刃しました。享年25（瑞山ずいざん会編『維新土佐勤王史』他）。

除幕式で土方とともに往年の懐旧談を披露した尾崎は忠亮のことに触れ、彼の決心を、幕府目付小林甚六郎の来宰と結び付けて語っています（『福岡日日新聞』）。慶応2年、五卿の帰洛を促すため幕府は小林甚六郎を太宰府へ派遣しますが、五卿側は幕府による五卿

勾引の一大危機と警戒、五卿も書面をもつて従臣たちにも動の決意を示し、殉難の覚悟を告げます。五卿の近辺にはわかにか緊迫し、「薩士は殺氣勃々ぼつぼつ、毎日大砲を太宰府の裏手なる北谷村辺に牽き出し、火通しと号して連発し、其の響轟々ごうごうとして幕吏の胆をぞ冷しける」（『維新土佐勤王史』）状況となり、この中で忠亮は

慚愧ざんきの決断に至ったと回顧しています。その死を惜しむ五卿は金子15両を、さらに実美は20両と手向けの歌を忠亮に贈りました（『回天実記』『維新土佐勤王史』）。

剣太刀つるぎ吾身わがみのうきに添ひ来つつ
旅路の露と消し人はも

墓碑は後に大町の光蓮寺に移され、忠亮の至誠の痕あとを現在に伝えています。
太宰府市公文書館 藤田 理子